

年頭所感

日本小児科学会 会長 高橋 孝雄



小児科医は子どもたちの代弁者であります。新年を迎えるにあたり、学会が代弁者として果たすべき役割について考えてみたいと思います。

代弁とは、だれかの思いをくみ取り、分かりやすい説得力のある言葉で表現することではないでしょうか。すなわち小児科医は、子どもたちの思いをくみ取り表現する人々ではないかと。小児科医が子どもの代弁者となるべき場面は、医療という枠を超えて広がっています。様々な場面で、子どもたちの苦しみ、喜び、寂しさ、迷い、あらゆる思いをくみ取る機会があります。

虐待の被害者である子どもは、それを現実として認識し、言葉で表すことはしません。親に大切にされていない、という悲痛、孤独、絶望があるはずなのですが、いったい何が問題なのか理解できずにたたずんでいるのです。そのような子どもたちに手を差し伸べ、思いをくみ取って、本人に「こういうことだね?」と寄り添い、その思いを両親に伝えるのも小児科医の仕事です。

小児科医はお母さんの代弁者でもあります。お母さん自身が、何が問題かをうまく理解できずに、漠然とした不安を持っておられることも多いのです。虐待の加害者である親に「あなたにも、こんな事情があるんじゃないかな」と寄り添ってみる。これが真の代弁者だと思うのです。それが我々小児科医の仕事です。

学会は会員の代弁者でもあります。2万人を超える会員が、何を問題視し、何を解決したいと願っているのか。意見を集約し、強い言葉にして発信する責務があります。さらに、外科系を含む小児医療を担う他の学会や看護師、薬剤師、療法士などコメディカルの方々の思いをくみ取り、代弁者となることも学会の使命と考えます。会員以外の医療従事者のご意見にも常に耳を傾け、代弁して行く必要があります。

学会は若い医師たちの代弁者でもあるべきです。医師の育成は学会の将来を左右する最重要事業だからです。小児科専門研修を始めようとしている研修医、既に始めている若手小児科医のために、彼らの声に耳を傾け、代弁者として厚労省や専門医機構に働きかける義務があります。プログラム制の運用により医師の地域偏在を解消しようとする戦略も重要でしょう。しかし、質の高い専門医を育成することこそが専門研修の最終目標だったはずで、若い医師たちの思いに寄り添い、彼らが自らの将来を託せるような研修体制、専門医制度を築いていきたいと思っています。

会長は会員の皆様の代弁者です。

引き続き微力を尽くしていきたいと思っています。どうぞ宜しくお願い致します。